

他産地は今、特別企画

## 繊維産業文化継承の現状

岡谷、駒ヶ根の養蚕・製糸業に見る 先人の偉業に学び、明日を探る

尾州地域新世紀産業振興委員会特別プロジェクト

### 2、諏訪、岡谷、駒ヶ根における蚕糸、製糸業

明治期、信州の諏訪湖湖畔・岡谷、諏訪、駒ヶ根地区では養蚕が盛んであったが、これら地区では繭を生糸まで一貫生産するのが通常であった。しかし、糸以降の絹織物の生産はなされなかった。「風土が乾燥しており、織物は適さなかった」という事情に加えて、生糸そのものに付加価値があり、輸出品目として成り立っていたからである。

その生糸は、諏訪湖を源流とする天竜川流域の工場生産され、「信州上一番」というブランドで、横浜から世界に輸出された。

当初、その品質は最下位の裾物とされていた。にもかかわらず、諏訪湖シルクエリアの生糸が、国内はもちろん世界のシルクの中心となったのは、生産性向上と品質改良の努力があったからに他ならない。それはあたかも尾州産地で洋服用の4幅毛織物の開発、品質向上の努力の過程と類似している。

(江戸時代末期)

生糸は開国と同時に本格的な海外に輸出される重要貿易品となった。安政6年(1859年)に甲州産生糸6俵が輸出されたのが、その始まりとされるが、同年岡谷も横浜経由で輸出を始めた。

始めは輸出単位も小さかった。海外でのある悲劇が信州生糸発展のひとつの要因になった。天保11年(1840年)、当時世界の生糸大国・フランスで蚕の病気が発生、生糸生産が壊滅的打撃を受けた。その代替として欧州各国が日本の生糸を求めたのである。ここから諏訪湖シルクエリアの養蚕、生糸産業は急成長をとげる。これはあくまで契機であって、努力なくして手に入れたわけではない。

(明治初期～中期)

諏訪湖シルクエリアの製糸工場はもともと小規模のものが大半を占めた。そのため各工場の生産量は少なく、横浜での取引単位である「千斤」(600<sup>匁</sup>)を揃えるには時間がかかり、そのための長期保存は品質上の問題もあった。

そこで製糸家たちは結社を作ることを考え、近隣の工場の生糸をまとめて出荷するようになった。結社を結成することで品質の均一化と量的確保もはかられた。

やがて

岡谷では片倉組(当時は片倉製糸) イチヤマカノ屋号を持つ林製糸など民間の大企業

駒ヶ根では組合結社の龍水社、上伊那社などが誕生した。尾州産地でいえば、一宮・尾西地区、津島地区、岐阜県羽島地区での産元問屋、親機の形成に相応しよう。

業界がまとまって会社をおこした事例は尾州産地にもあった。昭和23年(1948年)、尾西毛織協同組合が「毛織工場の操業安定は、毛糸の安定確保から」と「尾西毛糸紡績」を設立した。販売部門として「東海繊維貿易」も併せておこした。尾州産地では染色整理の品質安定を目的に「一宮整理」(現ソトー)も明治13年に設立されている。

この時代の経営者の事業意欲を感じさせる共同出資会社設立である。

諏訪湖シルクエリアが富岡など他地区、フランスなど他国と異なる最大の点は以下の2点である。

設備機械の相違

官営の富岡製糸工場に代表される大半の

製糸工場は価格の高いフランス式の輸入機械を使用していた。これに対して諏訪湖シルクエリアでは国産の「諏訪式製糸機械」を独自に開発した。これにより諏訪湖シルクエリアは格安な糸の大量生産に成功したのである。

尾州産地でも当初、4幅織機はドイツから輸入していたが、やがて平岩など国産織機が開発され、4幅毛織物の発展に貢献した。いかなる産業も独自の技術開発が発展の礎となる事例である。

#### 生産番手の相違

当時、世界のシルクをリードしていたフランスの生糸は12デニール以下の細番手であった。これに対して諏訪湖シルクエリアの生産番手は14デニール前後の普通糸だった。中国でも14デニール前後の生糸は生産されていたが、品質にバラツキがあった。折からアメリカではストッキングの需要が増大していたが、アメリカの女性は「フランス品は高すぎる」、「中国品は品質に問題がある」として、諏訪湖シルクエリアの生糸を選択したのである。イタリア製品と中国製品の狭間で悩む尾州毛織物にとっても教訓的である。

諏訪湖シルクエリアはこうしてアメリカという最大の顧客を獲得したのである。

(明治後半)

良質で均一の生糸を作るには原料である繭の品質が前提となる。岡谷の片倉組は自分の会社で飼育した良質の繭の飼育を養蚕家に働きかけ、できた繭は全量引き取った。生産した繭の納入先が一流の「片倉組」と決まっていることで、安心して増産と品質確保に努力できる。片倉組は全国に先駆けて、蚕種の統一に成功し、諏訪湖シルクエリアの品質はそれまでの優良糸が普通糸になり、全体として底上げされた。

生産量だけでなく、品質においても国内トップクラスになった諏訪湖シルクエリアの

製糸業は大正時代に入って最高の隆盛を見せ、片倉組は明治末に全国で初めて1万梱の出荷を誇り、さらに諏訪湖シルクエリアは全国製糸家のベスト10の半分以上を占めることもあった。



(全盛期のころの岡谷：岡谷蚕糸博物館パンフより)

しかし、その後の大恐慌など幾多の経済変化、二度にわたる大戦、為替変更、中国の生産拡大などから、昭和7年(1932年)に最高を記録した輸出はその後減少し続け、昭和45年(1970年)からほぼ皆無の状態に追い込まれた。昭和40年(1965年)には逆に輸入も始まり、生糸輸出大国・日本はシルク輸入大国となった。

今、岡谷には「現在、約800の工業事業所があるが、そのうち繊維はわずかに1、2社のみ」(テクノプラザおかやの話)であり、新しい産業として超微細加工に活路を見出している。

さらに駒ヶ根にはピーク時、地域14市町村1万8000養蚕農家で結成されていた組合製糸業「龍水社」の組合員は、平成7年の閉鎖時点ではわずか70名であった。「平成8年に完全に84年の歴史を閉じ、その名前が消えた」(駒ヶ根シルクミュージアムの話)。「中国品が10分の1の価格で入ってきては、手の打ちようがない。人材教育の場として学校経営も行っていたが、人を育てても産業がなくてはどうしようもない」(同)と学校も閉鎖された。

同じ道が尾州産地の前に敷かれているのであろうか。そうは思いたくない。